

### ベルクソンにおける言語の問題

大東, 俊一

---

(出版者 / Publisher)

法政大学教養部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学教養部紀要. 人文科学編 / 法政大学教養部紀要. 人文科学編

(巻 / Volume)

66

(開始ページ / Start Page)

55

(終了ページ / End Page)

73

(発行年 / Year)

1988-01

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00005348>

## ベルクソンにおける言語の問題

大 東 俊 一

ベルクソンの哲学はしばしば言語不信・言語批判の哲学と言われる。実際、最初の主著『意識に直接与えられているものについての試論』（以下『試論』と略記）の序文は次の言葉で始まっている。

「我々は自分の考えを必ず言葉によって表現し、またたいていの場合、空間の中で考えている。言いかえれば、言語は我々の持つ諸々の観念の間に、物質的対象の間と同じはつきりとした明確な区別、同じ不連続を設定するよう<sup>(1)</sup>に要請する。」(D I, 8)

ベルクソンによれば、この要請は実生活や大部分の学問において必要なものであるが、本来空間を占めていない諸現象を空間の内に並置することによって、ある種の哲学的問題を克服し難くしているという。

言語に対する不信表明はこれに留まることなく、以後ほとんどの著作において、ベルクソンは、言語が社会生活の有用性のために持続 (a. persistence) を空間化し、歪曲してしまうと繰り返し抗議した。しかし、言語によって持続を表現することが不可能であることを主張することさえ、言語によってしかなしえない以上、そこにある種のパラドックスを指摘する向きもあるが、まずは、上述のような言語不信がどのような言語観に根ざしているのかを確認する必要がある。

ところで、ソシュール以降の現代の言語学は、言語を社会的制度と見なし、言語の自立性を思考過程とは独立の過程として要請している。その結果、言語の社会的拘束力ということが強調され、言語に先立つ一般的観念は存在せず、言語以前には何一つ明瞭に識別されることはない<sup>(2)</sup>とされている。ソシュールによれば、心理的に言語を捨象して得られる観念などは恐らく存在せず、「あるいは存在しても、無定形と呼べる形のもとにでしかない」わけである。要するに我々の意識は言語による分節化を経なければ、「一種の形を持たない星雲のごときもの」に留まるのである。それゆえ言語学は形而上学を捨て、内観の方法に基づく心理学を退け、科学に立脚しなければならぬとされるわけだが、それにもかかわらず疑問はまだ残る。もとより言語による分節化によって初めて実在は実在として明瞭に呈示されるという主張を認めるにやぶさかではないが、それだからといって顕現する実在を背後から支える「星雲のごときもの」への考究を停止してよいということにはならないであろう。言語の分節化作用にのみ目を奪われて、それを支える地盤を顧みないのは一面的に過ぎるのではあるまいか。たとえ現代の言語学がいかに科学であることを標榜しようとも、依然として存在の問題は残っているのではないだろうか。

ベルクソンの言語観を言語道具説<sup>(3)</sup>として非難し去ることはやさしい。実際、ベルクソンは、意識に直接与えられているもの、絶対的な実在を目ざして探究の道を歩む過程で、言語は持続を空間化し、社会生活の有用性に奉仕するもの<sup>(4)</sup>として批判を続けたからである。しかし、彼の哲学体系の全体像を視野に入れるとき、その言語観の要は言語と非言語、言語と実在との連関を明らかにするところにあるというのが筆者の見解である。このことを明らかにするのが本稿の目的であり、それは同時に言語学における形而上学の果たす役割の追求でもある。とは言うもののベルクソンには言語を主題的に扱った著作はないし、まとまった論致も残されていない。まずは様々な著作に散見される言語に関する考察をとりあげ、彼の言語観を再構成することから始めよう。

(一)

ベルクソンは『試論』の随所で、我々の精神生活が個性的であるのに、言語は内的状態の共通な側面しか表現することができないと繰り返して告発しているが、このような事情は言語のどのような性格に由来するものであろうか。言語が何か共通的なものしか表現しえないこと、即ち、諸事象を一般化するものであることの由来を、我々はベルクソンが『物質と記憶』の中で一般観念 (*l'idée générale*) を論じている箇所を求めることができるだろう。ベルクソンは『試論』においては持続の概念の確立を急ぐあまり、言語に対しては単なる不信表明に終わっていたが、『物質と記憶』にあっては言語の発生を論じることになる。

ベルクソンによれば、一般観念は唯名論者の言うような別々の対象を無差別に指示する記号の同一性に由来するのではなく、概念論者の言うような個別の対象から抽象される共通な内包に由来するのではない。一般化するためにはまず抽象することが必要であるが、有効な抽象を行うためには既に一般化することができていなければならないから、両者は互いに循環する運命にある。一方、ベルクソンは一般観念の基礎を、意識的な命名や抽象ではなく、「特徴的性質あるいは類似の漠然たる感じ」(MM, 176) に置く。もし、知覚に続いて同じ反応が起こり、有機体がそこから同じ有益な効果を引き出し、知覚が身体に同じ態度を刻印するのであれば、そこには何か共通なものが生じるであろう。一般観念は表象される前にまず感じられ生じられているのである。自然発生的に抽象されたこの類似に記憶力が差別を加えて個体の知覚を構成するのに対して、悟性は漠然たる類似から一般観念を取り出す。そして、いったん一般観念が構成されると、今度は意図的に無数の概念が構築される。ここにおいて悟性は人為的な運動機構 (*des appareils moteurs*) を組立てることによって、無限に多様な個別の対象に対して有限数の反応をさせるのであり、この機構の総体が有節言語 (*la parole articulée*) である。

このような次第であるから、言語は共通的なもの・一般的なものしか表現しえないことになるが、ベルクソンに

あつては、以上のような言語発生論がそれ以後も維持されていくことになる。

ところで、一般化するという働きは、動物などにも見られるがごとく、言語に先立って存在するわけだが、ベルクソンによれば、言語の特徴はその一般性(généralité)よりもむしろ可動性(mobilité)にあるという(cf., EC, 159)。人間は社会を成して生きているが、昆虫の社会のように各個体がその構造によって予め果たす役割が決定されているわけではないので、各個人は社会における自らの役割を選びとっていかねばならない。それゆえに絶えず既知のものから未知のものへ移ることを可能にしてくれる言語が必要になるというわけである。即ち、語(mot)は知覚された事物からその心像(image)へ、さらに、「心像を表象する働きそのものの表象」(EC, 160)である観念へと拡がっていくのである。

このような記述からして、ベルクソンの言語観は言語名称目録説と見なされても致し方ないが、彼の言語発生論が知性の問題と深く関連していたことは指摘しておかねばなるまい。ベルクソンによれば、語のこのような可動性のおかげで、当初は道具を製作することを役割としていた知性も、利害を離れて自己の歩みを反省し、観念の創造者、即ち、表象能力一般としての自己の姿に気づくからである(cf., EC, 160)。ベルクソン流に言えば、言語は知性を目前の関心から解放するのに貢献したということになるが、言語の側からみると、語の可動性は一般性の裏返しに過ぎない。即ち、言語そのものは事物を指示するように作られており、それ自身もまた事物に過ぎないから、知性が事物ではない或る対象に新たに語を適用すると、その対象は直ちに一般性の刻印を押されてしまうのである。我々各人が自分流の愛し方や憎み方を持ち、その愛情や憎悪が各人の全人格を反映しているのに、言語はこれらの状態をどの人の場合にも同じように表わす、という『試論』で述べられている事態(cf., DJ, 123)の由来がここに見出しうるのである。さらに、語が観念まで拡がるという事態にしても、これが意味するものは、結局のところ、観念それ自体も一般性の刻印を押された何か共通なものしか表現できない、ということではない。

以上のような論述からは言語の否定的側面しか浮かび上がってこないようであるが、言語が我々人間の創造的進化において果たした役割について、ベルクソンは比較的肯定的な評価を下している。彼によれば、人間が世界のた

だ中に現われ、自然の種々の物理的運動を変貌させることができたのは優秀な脳のおかげである。言語は「意識に受肉の場として非物質的な身体を提供し、意識をして専ら物質的な身体にのみ依存しないでもすむようにさせる」(EC, 265)のである。この点を捉えてメルローポンティなどは、ベルクソンが言語について批判的に述べたことが、彼が言語のために弁じたことを忘れさせているとして、「紙の上や空間の中に固定されて非連続的な要素となってしまう言葉(Language)があるとともに、思考の等価物でもあり対抗物でもある生きた言葉(La parole vivante)も存在し、そのことはベルクソンも知っていた」と述べているが、上述のような事態に関する評価としては少々不適当であるように思われる。というのも、言語が意識に受肉の場として非物質的な身体を提供するということが自体は、人類の進化に大いに貢献したであろうが、共通的なものしか表現しえないという言語の性質は、そのことによって何ら変更を受けるわけではないからである。ベルクソンによれば、言語の原初的機能は「協働のための意志疎通の確立」(PM, 86)であり、言語は有益な効果をもたらす様々な事象を同一の觀念のもとに包括するものであった。言葉や觀念も進化することであろうが、共通的なものを表わすという功利的・社会的性格は依然として支配的であることをベルクソンは認めているのである。

## (二)

さて、以上のような言語発生論は、ベルクソンの言語観を道具説であるとか、名称目録説であると批判する現代の言語学に格好の言質を与えるようであるが、そこにおいてベルクソンが現代の言語学が等閑に付している言語の存在論的基礎をも問題にしていることを忘れてはなるまい。

「ベルクソンは記憶力(*la mémoire*)と同じ仕方で言語を分析している」というジル・ドゥルーズの指摘を待つまでもなく、我々が人の話を理解する仕方はひとつの記憶(*souvenir*)を見出す仕方に等しいとするベルクソンの見解にまず注目しよう。また、この際、ベルクソンにおいては、記憶力とは精神の単なる一作用ではなく、すぐれ

て精神そのものであることに留意したい。そこにおいて、過去とは活動をやめ、有用性をなくしたまま、存在がそれ自体で保存されている即自存在であり、いかなる意味においても心理的存在ではない。「純粹記憶(souvenir pur)」が無力、潜在的、非延長的などと形容されるのもこのためである。

ところで、我々が記憶を呼び戻そうとする場合、「我々は現在から離脱してまず過去一般(Le passé en général)のうち」について過去の或る一領野に身を置きなおす独特な働きを意識する」(MM, 148)が、この段階では記憶は依然として潜在的状态にあって、さらに「心像的記憶(souvenir-image)」へと現実化しなくてはならない。ここで初めて心理化が行われるわけであるが、この局面には二つの運動が同時に関与する。即ち、「並進運動(translation)」と「自転運動(rotation sur elle-même)」(MM, 188)である。前者は現在の状況からの呼びかけに応答し、或る記憶とそれを含む過去の全てのレヴェルを統合した不可分な表象を記憶力にもたらすために収縮する運動であり、後者は前者によって定位した水準から現在の状況に最も役に立つ側面を差し向ける運動である。そして、「純粹記憶」の現実化の最後の段階にあるのは、「心像的記憶」と知覚とが流れ込む共通の枠組である「運動図式(le schème moteur)」であって、この図式は「それ自体身体的態度に挿入された一種の精神的態度」(MM, 134)なのである。

ここに至って「純粹記憶」の現実化が完了するわけであるが、ベルクソンにあっては、知覚から記憶へと向かうのではなく、記憶から知覚へと進む過程が実在的であるとされている。換言すれば、記憶が現在の状況に先行しているのである。

ところで、ベルクソンにあっては、このような記憶の現実化の過程は、我々が話し言葉を理解する過程とパラレルな関係にある。即ち、「聴き手は対応する諸観念の中に、一気に身を置き、それらを聴覚的表象(représentations auditives)へと展開するのであり、聴覚的表象は運動図式に自らはまり込むことによって、知覚されたままのものとの音声に覆いかぶさる」(MM, 129)のである。通常は耳から入ってくる音声聴覚的表象を呼び起こし、聴覚的表象がさらに観念(意味)を呼び起こすと考えられているが、ベルクソンに言わせればそれは逆なのであ

て、我々はまず觀念(≡意味)<sup>(7)</sup>の領域に一氣に身を移すのである。これをドゥルーズ流に言えば、「存在論への飛躍 (le saut dans l'ontologie)」ということになるが、ベルクソンにおいては、意味は聴覚的表象への展開を待って初めて心理的存在になるのである。ここにおいて我々はベルクソンの言語観に意味の超越性というものを認めるだけでなく、言語の存在論的基礎を問題にしうる地平を見出すのである。ベルクソンは言語の完成された状態の分析から始めたのではなく、社会的制度としてのラングの諸形態のもとにあるいわば内的な鑄型を問題にしたのであって、それを「力動的図式 (un schéma dynamique)」に求めたのである。この「力動的図式」こそ「多数のイメージに展開しうる単純な表象」(ES, 161)<sup>(8)</sup>であり、記憶の現実化の過程において「並進運動」によってもたらされるあの不可分な表象に等しいであろう。また、この過程とパラレルな関係にある話し言葉の理解の過程において、この図式はさまざまな聴覚的表象へと展開する以前の統合された諸觀念に対応するものであろう。我々はこの「力動的図式」によって超越的な意味から現実の知覚へと赴くことができるわけであり、そのおかげで外的な言葉を理解し、習得することができるのである。前述した有節言語の起源を一般觀念に求めるベルクソンの言語発生論は、言語を解釈し、形成することによってその担い手となる内的な鑄型の存在論によって補完されるのである。

### (三)

さて、以上のような言語観に基づくかぎり、一般的なもの、共通的なもののしか表現しえないという言語の性質は依然として変更を受けないわけだが、ベルクソンの言語批判が知性批判と深く関係していることを指摘しておかねばなるまい。ただし、ここで注意しなければならないのは、彼が批判の対象とした知性のレベルの問題である。ベルクソンも認めるように、我々の思惟はその起源から直観的なものと知性的なものを併せ持っている。その原初的機能からすれば、空間における人間の労働を組織立てることを目的とする言語は、社会が利用すべき物質に対する精神の極めて一般的な順応であるゆえに、それを司る知性は「曖昧な知性 (intelligence vague)」(PM,



87)である。ヘルクソンはこれを「一般的知性 (l'intelligence général)」(PM, 89)とも呼んでいるが、この知性は言葉を適当に操って日常的な諸概念を組み合わせることに、蓋然的な結論を引き出すに留まる。ヘルクソンが批難しているのはこのような知性であり、「科学にきつて正確化された知性 (l'intelligence précisée en science)」(PM, 89) 即ち「純粹知性 (la pure intelligence)」(PM, 92)は知性のみに依存する問題 (= 物質に関する問題) に関しては「原理上、絶対 (un absolu) に触れる」(PM, 84)はずだとされるのである。もちろんここでは『創造的進化』における知性と物質の同時発生論 (cf., EC, 201) が前提となっているが、「純粹知性」がいかに精密な symbole を用いたとしても直観の内容を伝えることができないという事態には何らかわりはない。

ところで、ヘルクソンは言語を単に実用的見地から現実を裁断するものと見なすだけでなく、言語の社会的根源の中には彼の言うところの直観の光も宿っていて、そこから詩や散文芸術が誕生したことも認めているが (cf., PM, 87)、それならば直観と言語との関係を彼はどのように考えていたのだろうか。

言語は行動のために現実を裁断するものであり、安定性・固定性を必要とする。語 (mot) は比較的固定した意味を有し、「古いものの配置換えとしてでなければ新しいものを表現することはできない。」(PM, 89) ここで支配的なのは保守的な論理であり、そのような論理では何ら新しいものを創り出すことはできない。ヘルクソンはいつも言語をこのように批判する。一方、「直観的に考えるところは持続において考えること」(PM, 30)であった。直観はまず我々の内的持続に向かい、内的生命の不可分な流動を把握する。直観とは「精神によって精神を直接見ること」(PM, 27)、「接触であり合一でさえある認識」(PM, 27)であった。直観にとって本質的なものは変化であり、直観は持続を注視し、そこに予見不能な新しいものの不断的創造を見出す。

直観がかようなものであるとするならば、それを表現する言葉が既成の言葉の中から見つかるということはほとんどありえない。一方、直観は苦しい努力であり、長続きはしない。とはいえ、直観は言葉によってしか伝えることができない。ここにひとつのアポリアがある。直観を伝えようとする哲学者の側からすれば、言葉を直観にぴったりと合うものにするには、その意味を曲げなければならない。哲学者の精神は唯一にして二つとないかに見える

何か、一挙に到達したわけだが、この何かたるや、「予め語の中に与えられた多様にして共通な概念のうちになんとかして自らを開陳しようとする」(DS, 44)のである。かくして、哲学理論は既成のものの単なる配置換えではなく、独自の直観の共通的概念への展開ということになるが、直観も思惟であるかぎり、最後には諸々の概念の中に宿らねばならないことはベルクソンも認めざるをえない。彼によれば、思惟はそのままでは相互融合の状態を呈していて、そこには渾沌があるだけである。思惟が明確になるためにはいくつかの言葉に分散しなければならず、「我々は互いに浸透していた言葉を紙の上に書き並べたときに、初めて自分の精神の中にあつたことをはっきりと知ることができる」(ES, 22)のである。直観されただけの思惟は哲学の名に値せず、それが理論化されて初めて真の意味での哲学となるのである。

このようなベルクソンの論述を見るかぎり、いかに彼が直観の重要性を強調したとはいえ、論理を軽視したという批判が不当であることは容易に納得しうるであろう。ベルクソンは言語の働きを批判する一方で以上のように直観を定義し、意識に直接与えられているものを探求していくわけだが、ここでひとつの疑問が生じるかもしれない。即ち、前述のように、ベルクソンは言語の存在論的基礎を問題にしようとしたとはいえ、言語の働きを不当に切り詰めてそれを批判する一方、言語現象に先立つ直接的現象を想定し、それとの合一を直観に託したのではないかというものである。なるほど、ベルクソンは直観を明確にするためには言語の働きが必要であることを説き示したが、その場合とて言語は述定されるときにしか現れないわけであり、最前からのベルクソンの言語評価は依然として変わっていないように見える。たとえ直接的なるもの・絶対的なるものを把握することができたとしても、それを顕在化する何らかの作用がなければ、何かを直観したときさえ言えないであろう。直観と言語とを媒介するものを何と命名するかは別として、前述の疑問にも答えるべく、ベルクソンの哲学体系全体からさらに言語観を検討することが必要である。その過程を通して、言語観の形成において形而上学の果たした役割も浮き彫りにされるであらう。

## (四)

さて、ベルクソンによれば明晰性 (*clarté*) には二種類ある (cf., PM, 31)。まず、新しい観念が明晰でありうるのは、その観念が既に我々が熟知している要素的諸観念を配置しなおしたものだからである。これは知性的認識のなせるわざであり、通常の言語によってもたらされるものである。もうひとつは、根本的に新しく絶対的に単純な観念の明晰性であるが、直観から生じたそのような観念は構成要素を持たず、既存の諸観念をもって再構成することができないので、通常は逆に不明瞭であると見なされる。そこに直観の表現という問題が生じてくるわけであるが、通常の言語によつては表現できないことは言うまでもない。通常の言語が古いものの配置換えによつてしか新しいものを表しえないとすれば、そこにおいて支配的なのは「回顧の論理 (*une logique de rétrospection*)」(PM, 19) である。この論理は現存する諸事物や諸事象を可能性または潜在性の状態において過去の中へ投入するものであり、これによればあらゆるものが以前から可能であつたということになつてしまふ。諸事物や諸事象は或る一定時に発生するものであるが、それらの出現を確認する判断はそれらより遅れて到来するものであり、それ自体は日付を持つてゐる。しかし、真理は永遠であるという知性に深く根ざした原理によつてその日付は消失し、真なる言明に遡及的効力が付与される。現在において現実に生起するものを可能性・潜在性という形で過去へ押しやるのは、創造というものを認めないからであり、換言すれば、真の持続は存在しないという誤った確信を抱いているからだとベルクソンは批判している。それならば、一体ベルクソンはどのような論理が必要だと考えていたのだろうか。彼によれば、「この論理 (＝回顧の論理) を放棄したりこの論理に反抗したりするのが問題なのではない。この論理を拡大し、柔軟化し、新しいものが不斷に噴出しそこでは進化が創造的であるような持続にこの論理を適応させなければならぬ」(PM, 19) のである。しかし、このように述べる割にはベルクソンはこの「回顧の論理」を執拗に反駁するばかりで、論理の拡大・柔軟化ということに関してはあまり言葉を費やしていないというのが実

情である。ただ、これまでのことを考慮するならば、『思想と動くもの』の「緒論第二部」に彼の目ざす方向を示唆してくれる言葉を見出すことができるであろう。そして、これは同時に前述の直観と言語との関係という問題をも照らすものである。

それによると、直観が観念を超えたものであるとしても、観念の助けを借りなければ自らを伝えることはできない。そのために直観は最も具体的な観念、即ち、心像(image)に取り巻かれた観念を用いるが、そこにおいては、言葉では表現できないものを直喩(comparison)や隠喩(metaphore)が示唆している。いわゆる科学的な抽象概念は外界から抽出されたものであり、空間的表象を含んでいるので、それを用いるとかえって別のものによる置き換えをすることになってしまい、本来の意味での比喩になってしまう。「イマージュを伴う言語(Le langage image)」の方が意識的に本来の意味で語っており、抽象的言語の方が無意識的に比喩的な意味で語っている場合もある」のであり、「心的世界に取り組むや否や、イマージュは示唆しようとするに過ぎないとしても、我々に直接的な注視(la vision directe)を与えうる」のである(PM, 42)。

ベルクソンの「イマージュ」を単なる「心像」とか、修辭上の文彩などに見なしてはならない。そのように考えるならば、ベルクソンの言語は依然として画一的に諸事象に反応することによって言語共同体に奉仕する硬直した体系に留まるであろう。ここで我々は『物質と記憶』の思想圏に立ち戻らなければならない。その序には、「ヘイマージュ」というものを、我々は観念論者が表象(representation)と呼ぶものよりはまさっているが、実在論者が事物(chose)と呼ぶものよりも劣っている存在——〈事物〉と〈表象〉との中間にある存在——と解する」(MM, 1)とある。ベルクソンの知覚された存在に関する記述を捉えて、「存在は観客である〈私にとって〉あるのだが、逆に、観客は〈存在にとって〉あるのだという存在と私との回路はこれまで十分に確立されたことがなかった」とあるメルローポンティの指摘を待つまでもなく、ベルクソンが「イマージュ」という概念装置を用いて主観・客観の両義性を説いたことは重視しなければならないであろう。

ベルクソンが「イマージュを伴う言語」に至ったのは一九〇三年の「形而上学入門」においてであるが、この論

文が『思想と動くもの』に収められるとき、或る注が付加された。それによると、イマージュは少なくとも我々を具体的なものの中に止めておくことができるという記述をめぐって、「ここで問題になっているイマージュは、哲学者が自分の思想を他人に説明しようとするときに自分の心に浮かぶものである。直観に隣り合っていて、哲学者が自分自身のために必要とし、しばしば表現されないままにしているイマージュは除外する」(PM, 186)とある。エミール・ブレイエにならって、この二種類のイマージュのうち前者を「他人のためのイマージュ」(les images pour autrui)」、後者を「自分のためのイマージュ」(les images pour soi)と名づけておくことにしよう。ブレイエの言うように、両者を「同じ実在の最も異なった二形態<sup>(37)</sup>」と見なすことにも異論はない。というのも、ベルクソン自身が、二種類のイマージュは、「同一の原典を二つの違った言語に翻訳しても、両者が同じ価値を持つ」と同様、同じ価値を持っている」(PM, 130)と述べているからである。

さらに、ブレイエは、「他人のためのイマージュは哲学者自身が抱いていて表現されないうままに留まっている」自分のためのイマージュ」によって「賦活される(sont animées)」と言っているが、この「賦活される」という事態は言語の場において一体いかなる事態を表わしているものであろうか。これまでのところ、ベルクソンの言語が決定される場合にのみ現われていたことを思えば、この「自分のためのイマージュ」はしばしば表現されない状態に留まるがゆえにいつそう重要なのではないだろうか。表現されないということは、ベルクソンの文脈では決定されないということに等しい。しかし、ここで我々はベルクソンの見解に対して、言語の働きは決定されなければ現われないのかという疑問にとらわれるのである。なるほど、ベルクソン自身は自らが考える言語は決定される場合にのみ現われることを認めているが「自分のためのイマージュ」というものを考えるとき、ベルクソンの意図に反して、そこに決定以前の或る言語の作用を見出すことができるようである。これをかりに言語の前述定的作用と呼んでおくが、これは我々の経験が即自的存在との直接的な接触ではなく、既にそのようなものとして意味付与がなされて、非主題的な渾沌の地平から立ち現われてくるという事態(例えば、日常的なレヴェルでは、我々は音を単なる物理的な音としてではなく、「自動車の騒音」、「不審な物音」として聞いている)に単に対応するに留まらない。

さらに、ベルクソンの場合、直観によって絶対的なものに到達できるものであるから、「自分のためのイマーージュ」は絶対的なものへの「直接的な注視」を与えてくれるのである。前述のように、ベルクソンにあっては、イマーージュは主観と客観との架橋であり、その架橋上を主観の方向へ進むことによって、絶対的なものに無限に接近することができるようである。先に言語の前述的作用と呼んだものは、この絶対的なものを開示する働きにほかならない。以上のような論点はベルクソン自身ほとんど意識していなかったように思われるが、ここに我々は彼の言語観がその形而上学に深く浸透されているのを見るのである。

## (五)

さて、以上のような事態をふまえると、「イマーージュを伴う言語」による表現、即ち、直喩や隠喩は直観の内容を伝えるためには回り道ではなく、かえって目的に直行することであることが判明する。メルローポンティの言う『生きた言葉』という表現もここにおいてこそ妥当すると思われるが、ベルクソン自身も哲学の言語が直喩や隠喩を採り入れることによって上述の論理の拡大・柔軟化が可能であると考えていたようである。実際、ベルクソンの著作は珠玉の比喩に満ちており、哲学的営為の最初から彼は実践をもつて自らの態度を示したと言えよう。

しかし、そのイマーージュに関してさらに問題が待ち受けている。「イマーージュを伴う言語」は我々を具体的になるものの内に止めおき、「意識を或る直観が把握されるべき点へ正確に向けること」(PM, 158)ができたが、絶対的なものへの無限接近の可能性を有するとはいえ、イマーージュそれ自体は直観へ至る途上にある道標に過ぎない。イマーージュの数を尽くしたとしても事情は同じである。というのも、到達しようとしている思惟が動きそのものであるのに対して、イマーージュそれ自体は畢竟不動なるものでしかないからである。

さらに、前述のように、イマーージュが直観を示唆してくれるとはいえ、読者の心に描かれるイマーージュが著者の思想の中に存在していたものと異なっている場合もありうる。ベルクソンによれば、「おそらくこれら二つのイマ

ーシュは、またおそらく同じ価値を持つ他のイマーシュ同様、全部一度に現われて、哲学者の思想の発展を通じて行列をなして彼に一步一步ついて行った」(PM, 130)のである。そうであるならば、著者の思考に動きを取り戻すことによって、道標にしか過ぎなかったイマーシュの間隙を埋め、著者の独自の直観へ到達することも可能はずである。思考は本来は不可分なひとつの動きであるので、それを表現するために選んだ言葉がいかにイマーシュを喚起するようになったとしても、動きが停止してしまったのでは、そのようなイマーシュも単なる模造品に堕してしまふであらう。思考に動きを取り戻してやることは、言語が喚起するイマーシュの働きを補完することでもあるはずだ。

しかしながら、ベルクソンはそのような方法に関して体系的に述べているわけではない。ここでもベルクソンが提示する方法は極めて萌芽的である。思考の動きというものに注目しようとするとき、我々は『試論』の思想圏に連れ戻される。美的感情の中で最も単純なものとされている優美の感情 (*le sentiment de la grâce*) についての考察が参考になる。

ベルクソンによれば、(cf. DI, 9-14)。優美の感情とはまず外的運動の中での或る種の自由自在 (*facilité*) の知覚であり、自由自在な運動とは互いに他を準備し合うような運動であるので、我々はそれに続く運動を予見することができる。そこにあつては、次に来たるべき運動の方向がそれに先立つ運動の中に示されている。さらに、この優美な運動がリズムにのり、音楽がそれに伴うと、我々はリズムと拍子のおかげで踊っている人の動きをますますよく予見できるようになる。そこにはまず或る種の身体的共感があり、「それは精神的共感との間に親和力を持しているために、それ自体我々を楽しませるものであつて、精神的共感の観念を微妙に暗示している」(DI, 10)のである。結局のところ、優美の感情の本質はベルクソン流に言えば運動への共感であり、我々は優美なものの中に「我々に向かう可能的な運動と、潜在的あるいは生まれかかっている共感との前兆を見抜いている」(DI, 10)のである。

ここで我々はベルクソンの芸術論に踏みこむ余裕はないが、芸術の目的が悟性的な分別を眠らせて、「暗示された

観念を実現したり、表現されている感情に共感したりする全く素直な状態に我々を連れて行くことだ」(DI, 11)とする彼の言葉には注目しておこう。反省以前の共感是我々の意識と他の諸々の意識が互いに浸透し合う可能性を証明している。そこにあるのは心理的な相互浸透の現象であるが、ベルクソンは直観のうちに意識一般を超えてさらに深く共感する能力を認めている(cfr. PM, 28)。芸術はベルクソンにあつては哲学思想と不可分であり、その普遍的例証であつたと言っても過言ではないだろう。

さて、以上のような観点に立つとき、言葉の芸術、即ち、詩に関しても事情は同じである。詩人は自分の感情をイマージュと化し、さらにそれをリズムを伴った言葉として送り出すが、我々の方はそこからイマージュの情動的等価物である感情を感じる。しかし、「これらのイマージュは、リズムの規則正しい運動がなければ、それほど強力に再現されることはないだろう」(DI, 11)とベルクソンは言う。ここでは言葉のリズムが詩人の感情の曲線を描いており、我々はそのリズムに共感することによって初めて詩人の感情を我がものとすることができるのである。

さらに、思考の伝達に関しても事情は同じである。ベルクソンによれば、著者の思考のうねり(les ondulations)が我々の思考のうねりに伝えられたとき、そこにあるのは個々の言葉というよりも、むしろ言葉を貫いて動いていく意味であり、二つの精神は直接的に振動し合っているのである。従つて、「言葉のリズムには思考のリズムを生ずる以外の目的はない」(ES, 46)とベルクソンは言う。

それならば、詩人の感情のリズムと我々の感情のリズムとの共感、思想家の思考のリズムと我々の思考のリズムとの共感が何によって可能となるかといえば、「思考のリズムとは、思考に伴ってほとんど無意識に生まれつつある運動のリズムでなくて何であらうか」(ES, 47)というベルクソンの言葉が示唆を与えてくれるだろう。この「生まれつつある運動」こそ、ベルクソンが『物質と記憶』の第二章で再認について語った中に見出される例の「運動図式」である。この図式は我々の意識のうちに「生まれつつある筋肉感覚」(MM, 12)という形で進展し、著者の思考の動きを粗描する。ベルクソンによれば、我々はまず一気に意味の中へと飛躍し、次いで知覚的イマー



ジュへと下降していくが、記憶力の奥底から呼び起こされる「純粹記憶」が展開して「心像的記憶」となり、次第に流れ込んでいくのがこの「運動図式」であった。

さて、それでは、この「運動図式」が思想家の思考のリズムを我々に伝え、それによって我々を独自の直観へと指し向けてくれるとすれば、そのような効果はいかなる方法によって確かなものとされるのであろうか。ベルクソンは「朗読術 (Part diction)」<sup>1)</sup> 即ち、声に出して正しく読むことがそれを可能にしていると言っている。読まれるページには句読点による区切りとリズムがあるが、「朗読術」の役割は「それらを正しく表し、パラグラフの様々な文章と、文章の様々な部分との時間的諸関係を考慮し、感情や思考の緩やかな強まり (crescendo) を不断に辿って音楽的に最高潮とされる点に至ること」(PM, 94)にある。知性によってニュアンスがつけ加えられるのはその点である。それ以前に構造および運動の知覚がなければ、ニュアンスは意味を成さない。個々の言葉を然るべく選んでも、句読点による区切りやリズムの助けを借りなければ、言いたいことは正確には伝わらない。それらに助けられて、「読む人は一連の生まれつつある運動に導かれて、著者自身が描いているのによく似た思考と感情の曲線を描くようになる」(ES, 46)のである。このようにして著者の精神と読者の精神とは共感し合うわけであるが、ベルクソンはこの「朗読術」と哲学的方法としての直観との間に一種の類比が存在することを指摘するのを忘れたかった (cf., PM, 95)。

## 結 語

これまでのところで概ねベルクソンの言語観を浮き彫りにすることができたと思われるが、そこには彼の基本的な哲学的態度が色濃く影を落としていることが窺えるだろう。最初にも述べたように、ベルクソンは言語の問題を扱った著作やまとまった論攷を残していない。そのため各著作においては、その時々々の哲学的関心が先行し、言語に関する分析はそれをあとから追いかける形になってしまっている。一面的であるという批判をかわせない事

情はある。しかし、彼の課題が *symbol* によって断片化・抽象化された實在の本源の姿を回復することであることを思えば、彼の言語理論をその哲学体系の中にもう一度置き直してみる必要がある。本稿はそのささやかな試みであった。

確かに、ベルクソンの言語理論には道具説とか言語名称目録説と批判されても致し方ない側面はある。しかし、それは言語発生論に関してであり、それとて現代の言語学が忘れている或る知見を蔵しているに見える。即ち、觀念の発生と語の発生との同時性に関する指摘であるが、それは思考過程と言語との何らかの対応関係を予想させるものであり、言語の自立性を思考過程とは独立の過程として要請する現代の言語に対していくらかの示唆を与えるものであろう。さらに、ベルクソンは記憶の理論を援用して、言語の存在論的基礎をも問題にしたが、これこそまさに現代の言語学が等閑に付している問題であらう。しかし、ベルクソンの場合、前述のような言語発生論のゆえに、言語そのものによっては依然として實在を捉えることはできない。ベルクソン自身が言語は述定される場合のみ現われると考えていたことが禍したのである。そこでベルクソンは具体的なイメージを介して實在への無限接近を企てるのであるが、この過程はいかなれば言語の前述的作用・世界構成的作用であり、ここに彼の意図に反してではあるが、言語理論に形而上学が深くかかわっている様子を見てとることができよう。とはいえ、ベルクソン自身が言語不信を乗り越えるために、「イメージを伴う言語」と思惟に動きを取り戻す「朗読術」の有効性を提示したことに変わりはない。しかし、前者に関しては、哲学の言語に比喩を採り入れることを主張したものの、比喩自体の理論的分析は何ら示されていない。我々は各著作の中に彼が紡ぎ出した珠玉の比喩を見出すのみである。一方、後者に関しても、それ以上の方法論的發展はほとんど見られない。もっとも、動きへの共感ということ自体は極めて単純な事実であるので、それ以上發展させる必要がないのも当然なのかもしれない。いずれにしても両者相俟って働くところに言語不信を乗り越える端緒を見出すのである。

## 注

- (1) ヘルクソンの著作からの引用は以下の略号を用い、P. U. F. 版の頁数を示すことにする。また、訳文中の傍点は原文ではイタリック体であることを表すものである。
- DI..... "Essai sur les données immédiates de la conscience"
- MM..... "Matière et mémoire"
- EC..... "L'évolution créatrice"
- ES..... "L'énergie spirituelle"
- DS..... "Les deux sources de la morale et de la religion"
- PM..... "La pensée et le mouvant"
- (2) リードランシエのノート、第二回講義、断章番号一八〇二。(丸山圭三郎『ソシュールの思想』△岩波書店▽二二〇頁より引用)
- (3) 「非言語と言語」(新岩波講座哲学『経験 言語 認識』所収)という論文において、古東哲明氏も筆者と同じ問題意識で出発しているようであるが、ヘルクソンの言語観を規定する段では、あまりにも一面的過ぎる。ヘルクソンは言語に関するまとまった論放を残していないので、彼の言語理論を検討する際には、彼の全哲学体系からの展望が不可欠であろう。
- (4) cf. DI, pp. 96-98, p.123
- (4a) M. Merleau-Ponty, "Éloge de la philosophie", Gallimard "Collections idées", 1953, P. 36.
- (9) Gilles Deleuze, "Le bergsonisme", P. U. F., 1968, p. 52 ヘルクソンは *mémoire et souvenir* とを原則的には区別して用いている。前者は記憶作用を、後者は記憶されたものを意味している。本稿においても前者を「記憶力」、後者を「記憶」として区別して用いている。
- (7) *ibid.*, P. 52.
- (8) ドゥルーズも両者が等しいことを認めている。Deleuze, *op. cit.*, P. 63.
- (9) 「内的な言語」を認め、それによって「外的な言語」が形成されるとする見解は、メーヌ・ド・ビランの言語論の系譜

- とひたひたのちのちのち。cf., Maine de Biran, "Œuvres complètes", XII, Slatkin, 1982, p. 194.
- (10) 「回顧の難題」と題するベルタンの註解を『無』や『無秩序』の題名に於ける註解と對比して見よう。cf., EC pp. 238-259, pp. 296-323, PM, pp. 64-70, pp. 105-109
- (11) M. Merleau-Ponty, "Signes", Gallimard, 1960, p. 233.
- (12) Émile Bréhier, "Images plotiniennes, images bergsonniennes", dans "Les études bergsonniennes" II, P.U.F., 1949, 126.
- (13) *ibid.*, p. 126.
- (14) ベルタンの直観とイメージとの関係に言及しているのは、『形而上学入門』("Introduction à la métaphysique", 1903) のこの箇所が最初である。「直観」という用語がはつきりと確立されたのがこの著作に於いてであることは、そのことによつて逆に言語の役割が見直されるという事情もあったように思われる。『試論』や『物質と記憶』における直観の概念をめぐっては、L. Husson の研究("L'Intellectualisme de Bergson", P.U.F., 1947, pp. 2-9) を参照。